

---

# 東方幻想異端

オワタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方幻想異端

### 【NZコード】

N10850

### 【作者名】

オワタ

### 【あらすじ】

あらすじ 夏休み、実家に帰省した。そこで妙な事件が起こった、そしてその事件で妙で胡散臭い妖怪賢者と出会い。少年の人生は変わってしまった。

## プロローグ的な何か（前書き）

東方Projectの一次創作のオリジンものです。  
独自設定・解釈はありますが、  
それでも、大丈夫。OKの人はどうぞ。  
苦手な方にはオススメできません。

## プロローグ的な何か

現代、博麗神社。

その土地に住む人でも、その場所を知る人は少ない。  
山の中にあるので、ほとんどの人が来ることが無いので最低限の手  
入れしかされていない。

この土地の管理者が半年に一度ほどの割合で雑草を抜いたり、清掃  
にくるのだ。

ちょうど、その時期と重なり博麗神社は綺麗になっていた。

鳥居は何度も塗装した跡が見られるし、本堂の修繕箇所も数え切れ  
ないほどある。

あえて言つなら、修繕も塗装もしていなのは賽銭箱だけである。  
そんな神社に1人の客が来ていた。

この土地の管理者の孫にあたる、少年。

高橋 智和たかはし ともかずである。

「久々に来たな~」

のんきな声で言つ。

彼は中学校から全寮制の学校に入つていた。

ちなみに野球部に所属していたので、長期休暇もほとんど帰れなか  
つたし。

ゴールデンウイークなどの連休も部活動で帰省できなかつた。

なので、彼は小学生卒業以来この場所には来ていないのである。

賽銭箱に5円玉を投げ入れる。

「神様ね・・・・・本当にいるなら、この腕を治してくれない  
かな・・・・・」

智和の学校はエスカレータ式なので、高校に上がつても野球を続け  
るつもりでいた。

だが、今年の1月の事である。

帰省した時に、この神社に向かおうとしていた時に運悪く地震が起つたのだ。

雪のほとんどが溶けていた事もあり、土砂崩れを起こしたのだ。土砂崩れには巻き込まれなかつたのだが、倒れてきた木に右腕を押し潰されてしまったのだ。

木の枝のいくつかも彼の腕に突き刺さつた。

医者に、

「リハビリをすれば、田常復帰もできるだろ？」

しかし、残念だがもう野球どころか腕を使うスポーツはできないと思ってくれ……。」「

そう言われた。

だが、半年かかるはずのリハビリを僅か1ヶ月で終えたのだ。そして、今までのように彼は野球を続けようとしたが無理だつた。左腕で野球を続けようと、考え方努力するも思うように上手くいかずになんかに迷惑をかけ続けた。

これ以上は迷惑をかけまい、と彼は野球部を退部したのだ。

「いかんいかん、またネガティブになる事を考えるといひだつた」世界には、漫画のような展開は滅多にないのだ。  
利き腕が潰れたなら諦めるしかないのだ。

「そー言えば、爺さんが言つてたな。この神社は、違う世界の博麗神社に繋がつていて」

子供の頃に信じていた記憶がある。

「実際は・・・・あるわけ無いのにな」

爺さんから聞いた話。

賽銭箱に小銭を投げ入れると、その小銭が消えてしまうのだ。ビデオカメラを入れてどうなつてているのか、と調べようとしたが結局そのビデオカメラも消えた。

なので、この神社はどこかに通じているのかも。

そう考えた奴がうちの「ご先祖様にいたようで、今はそんな感じに語

られている。

懐かしい思い出に浸つていると不意に携帯電話がなつた。

従兄弟や叔父、伯父、叔母、伯母も帰つてきたらしく、オレも帰つて来いといふ事だ。

やれやれ、そう思いながら博麗神社の階段を下る。

その時、1人の女性とすれ違つた。

金髪で日傘を差して、どこかお嬢様っぽい感じの女性だった。

「こんにちは」

「あ、はい。こんにちは」

不意にあいさつをされ、遅れてあいさつをしてしまつた。

女性はにっこりと笑つて、博麗神社に向かつていつた。

誰だつたんだろ？・・・・・？

爺さん関係の人か？

## 1 始まり（前書き）

連載を出したりとして、ミスって短編の方があると思いますが無視してください。

本当に迷惑をかけてスミマセンデシタ。

# 1 始まり

山を降りて、家に向かう。

ここは、田舎で名所はなく。

川も綺麗で、山もまったく伐採されていない。

近くに大きな街があり、ほとんどの人はそこで買い物をする。

徒步20分くらい。

しかし、学校はないので。

こっちの小学校に通う他ないので。

小学校は全児童、500人ほど。

中学校だと300人ほど。

中学に上ると、オレみたいに向こうに行く奴がほとんどだ。だが、女子は別である。

数十年前から大規模の女学院が田舎の片隅にあり。今でも結構な人数がいるらしい。

「あ、兄さんだ」

「ん？ 有希か・・・・・・・・」

こいつは、妹である。

さつきも言った通りに女子は、大学もこの地元にあるので妹達はこの田舎から出る気はないらしい。

「帰りか？」

「そーだよ。夏休みの補充授業は午前中だけだからね」

能天氣で馬鹿っぽい奴である。

「亜希と美希は？」

「あの2人は、頭良いからね。家にいるんじゃないの？」

「会わなかつたぞ。むしろ、お前だけが馬鹿なんだろ」

「そんな事ないよ！」

顔を真っ赤にして怒る、中学生になつても五月蠅い妹だ。

うちの家族構成には興味はないだらうから、適当にとばしてくれ。

爺さんの子供は、5人いるんだ。

ちなみに長男がオレの父さん。

長女、次女、三男 + 三女の双子。

なので、うちの父さんがここに住んで爺さんの世話をしたり土地の管理をしている。

オレの兄弟は、長男、長女、次男、<sup>オレ</sup>三男である。

父さんの妹、長女の人が十年前に無くなつてから、長女さんの娘3人を父さんが引き取つた。

彼女らが当時2歳、3歳、4歳の頃の話である。

亜希が長女で、有希が次女、美希が三女だ。

引き取つた理由は、金錢的に余裕がある。とオレの母と姉が世話好きだからつてもある。

一番上の兄貴が、医者。次男の兄貴が、教師（仮）。姉貴が保育士である。

ちなみに全員がオレより6以上の年が離れている。

夏休みと冬休みには母さんの兄弟姉妹も遊びに来るので、かなりの規模になる。

家は半分和風、半分洋風で豪邸か屋敷かなんと云つて良いか分からぬ感じである。

何でも、一番上の兄貴が生まれた記念に家を改築したらしい。

家に戻ると宴会が既に始まつていた。

兄弟どころか、叔父、伯父、叔母、伯母、従兄弟とほとんどが酒を飲んでいた。

まだ、7時前だぞ？

酔っ払いに絡まるのが嫌なので、早急に自分の部屋へ向かつ。

「」うちに帰る時に一緒に持つて帰った携帯ゲーム機でモンスターハンターのゲームを始める事にした。

そうして、居れば同年代くらいの従兄弟達も遊びに来て騒がしくなつていく訳で。

何だかんだで、騒ぎ、遊び、最終的には全員が体力切れになるわけだ。

オレ以外の全員が寝てしまつた。

ちなみにオレの部屋は占拠されたので今夜の寝床も探さなくてはならない。

歩き回つていると、爺さんの部屋の前にたどり着いた。

まだ、灯りがついていて、音が聞こえる。

「爺さん、何やつてるんだ？」

「ん？ おお、智和か。いや、何。倉庫の鍵を無くしてな

「倉庫・・・・・・？」ああ、あの倉庫か」

うちには、新しい倉庫と古臭い倉庫がある。

新しい倉庫は、オレやオレの兄貴達が小さい頃に遊んだおもちゃが入つてるらしい。

古臭い倉庫は・・・・・ボロイ以外の印象がない。

新しい方の鍵は玄関にかけてあつたはず。

「ぬ？ おおお、あつたあつた」

横に長い箱の中に一緒に入つていた。

元々、箱に入つっていたものは・・・・・見なければ良かつた。

ゾンビゲームお馴染みのアレでした。

「爺さん、それ・・・・・」

「うむ？ 懐かしいの～」

「もしかして、爺さんの？」

「そうじや。昔、話した気がするんじやが・・・・・？」

「いや、記憶にない」

「そうか。ならもう一度聞かせてやるわ」

「いや、だから聞いた事が・・・・・」

爺さんの話は1時間ほどの中だ。

若い頃、爺さんは何処とも知れぬ奇妙な世界に飛ばされたそうだ。  
その世界では『弾幕』と言う、攻撃方法を用いて戦うらしい。

妖怪に襲われるも、爺さんの愛銃で撃退したらしいのだ。

元の世界に戻るために爺さんは、その世界を回ったそうだ。

時には、最速を名乗る天狗、自称最強の妖精、夜の間だけ目を見え  
なくする妖怪。

吸血鬼や未熟な剣士、自称閻魔の少女、向日葵の畑に住む女性と戦  
い元の世界に戻る手段を探した。

銃は一度壊れたらしいのだが、森に住む半妖の青年が修理してくれ  
たらしい。

そして、その青年から太刀と小太刀を拝んでもらつたそうだ。  
ちなみに太刀と小太刀は無くしたらしい。

最終的には八雲と言う、女性が元の世界に戻してくれた。

今一、信じ難い話である。

「いいんじゃよ。自分だけでも、眞実を知っているのだからな」

その時、ほんの一瞬だけ爺さんが別人に見えた気がした。

「それじゃ、倉庫の中を漁るとするか。ほれ！孫、お前も手伝わん  
かい！」

「へいへい」

面倒だが、オレも倉庫の中身が気になつたので行くことにした。

さつきの爺さんの言つた、妖怪とか弾幕とか訳の分からぬ世界に  
行ってみたい。

そう、思った。

けれど、そんな事を思ひほど・・・・・オレは生きていくのが嫌になつたのだろうか・・・・・?

同時刻 現代 博麗神社

花火のような色鮮やかな閃光や弾丸が神社を照らしていた。

「妖怪賢者、恐ルル一足ラズ！」

細い人影が2つ、閃光や弾丸を用いて戦っていた。

妖怪賢者と呼ばれた方は息が止がつていいく。

「では、その口。貰おう！」

妖怪賢者と呼ばれた方は、腹を爪で貫か

妖怪賢者と呼ばれた方は、腹を爪で貫かれ、頭を掻まれる。

声にたまない咲で響いた

「アーティストの心」

言葉通り虫の息だつた。

כאי ייְהוָה יְהוָה יְהוָה

殺さなくとも勝手に死ぬと判断したのか もう片方は去っていって

•  
•  
L

視界は揺らいで、虫の声すらもはつきりと聞こえなくなつていつた。そして、妖怪賢者は氣を失つた。

## 1 始まり（後書き）

グダグダでスミマセン。  
文才はないと自分で思いますが、お付き合いいただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1085o/>

---

東方幻想異端

2010年10月8日21時41分発行